

終戦およびシベリア抑留生活

栃木県 天 野 喜 一

出生から入隊

出生地 栃木県小山市中央町

生 年 大正十三年四月十八日

出身校 小山高等学校 昭和十六年十二月卒業

就職先 東京電力株式会社栃木支店 昭和五十六年

定年退職

ソ連軍侵攻前

入 隊 昭和十九年十一月二十日

場 所 宇都宮東部三六部隊（現役兵）

教 育 中国河北省高揚 第六三師団二九九三部隊

機関銃中隊

転 属 昭和二十年六月、北支派遣軍の収縮に伴

い、満州へ増援師団として関東軍の隷下と

なる。

当時地理的にも満州国に急遽移動が可能であった第三九師団・第五九師団・第六三師団・第一一七師団の四個師団が選定移動の理由として対象になった。

昭和十六（一九四一）年の関東軍特別大演習における関東軍は、二十個師団約七十万の兵力を有していたが、昭和十九年以降は大量の精鋭師団が南方戦線へ転出となった。

関東軍は根こそぎ動員にて兵員の補充を行い、最終的には約六十万余の膨大な兵力となったものの、装備劣悪な関東軍となった。

我が師団は満州西部方面の防衛が任務であった。もともと関東軍は、沿海州ソ連軍の侵攻を阻止する作戦が主であり、西部方面の防衛は手薄であり、僅かに承德の一〇八師団、白城子に一〇七師団が駐屯するだけであった。

外蒙古からソ連軍が侵攻することが想定され、この

弱点に我が六三師団および三九師団・一一七師団が北支派遣軍から転入配置され、七月初旬には一応展開が完了された。

戦争末期に欧州方面から逐次極東に回送されたソ連軍の兵力は膨大なものと想定され、満州の東北西三方面のどこからでも侵攻可能な状態では、全満州を放棄して満州の南端通化付近の山岳にて、最後の一兵まで抗戦するという以外に方法はなかったものと想像されるが、在留邦人の保護に関する議論が集中し、軍命令に一貫性を失ったことも事実である。

ソ連軍侵攻

昭和二十年八月九日、熱河省万里の長城付近の八路軍討伐作戦行動中に、日ソ交戦の情報を受信し、即時作戦を中断し古北口に帰隊して列車にて承德を経由し錦県に急進した。

陣地構築の作業中に、周りが急に騒がしくなり、停戦の大詔が発せられるを知り、「日本は降伏したらしい」「まさか、そんな馬鹿な話があるか」と半信半疑

の状態であった。

師団司令部の指示に従い、錦県防衛司令部を市内の学校に設置し、直ちに在留邦人の保護と市内の治安維持の任務に就いた。

満州方面軍の不安は、果たせるかな、ソ連軍の進攻によって見るも痛ましい在留邦人の惨状が現実となった。当時市内は物情騒然たる有様で、奥地から着のみ着のまま荷物を背負い、幼児の手を引き在留邦人が引き揚げて来る姿、満州国軍の反乱、民衆の暴動、殺人強盗、食糧飢餓、火災発生など戦々恐々の状態であった。

また、満州国を占領したのはソ連軍であり、中国軍内にも毛沢東の共産軍と蔣介石の国民軍に分かれ、日本軍武装解除における武器・弾薬の獲得に複雑な様相を呈していた。

終戦

同年八月三十一日、ソ連軍の戦車、兵員を満載した自動車が続々と錦県に進駐し、一切の武器・弾薬を返

上し遂に屈辱の武装解除となり、旧日本軍貨物廠に収容されることになった。貨物廠内には食糧、被服、日用雜貨類が大量に保管され、この物資をソ連領内に輸送するための積み込み運搬作業はすべて日本兵士が従事した。倉庫内には食糧豊富で、地下には缶詰や航空食糧など、今まで見たこともない物まで味わうことの出来たことや、下着類も大量に保管され、毎日新品に着替えるなど幸いであった。

どうせソ連軍に没収されるなら、身につけるだけ身につけ、食べる物は食べ、新品の軍衣、下着、靴、時計、毛布など背負えるだけ集め、祖国への帰国準備を期した。

八月の炎天下における物資の積み込み作業のため、体は汗と埃にまみれ、野積みの日本酒で風呂を沸かし入浴したことも忘れられない。

シベリア抑留地への旅

貨物廠における約一週間にわたる物資の積み込み作業も完了し、錦県飛行場に集結し、帰国に伴う新たな

部隊の編成が実施された。祖国日本に帰還することをソ連軍より指示され「ヤポンスキー・トウキョウ・ダモイ・ハラショー（日本へ帰国おめでとう）」の口車に乗せられ、スキのなびく秋も深まる同年十月七日、貨車に乗車して満州を北上した。

途中逃亡者が出たことで、貨車の扉は表から鍵が掛けられ、車内は暗く、空気の濁りを感じ、衣服の洗濯、入浴は一切なく、環境の悪い車内において、戦友一同に疲れが見え始め、体の不調を訴える者が続出した。

同年十一月二十五日、走り続けた貨車は満州の最北端最終駅黒河に到着した。秋風を身に感じ錦県を出発し、満州を一路北上して千三百キロメートル、五十日間にはわたる貨車生活の旅は終わり、既に酷寒零下三十度の真冬の時期となっていた。

約二カ月の貨車生活は、シラミ・寒気・飢餓の連続であり、悪い環境の中で人間として極限の生活であり、今思うと実によく耐えたものと思考される。

凍結したアムール河の対岸にソ連領ブラゴエシチュ

ンスクの街がよく見える。太陽は出てはすぐ沈み、北極圏に近いことを感じ、早速そりを使って携行した物資の輸送開始となった。

寒さと空腹が重なり、長期間の貨車生活のため体は疲労こんばいに陥り、そりを引く力も限界に達し、死の街道を歩く地獄の状態であった。

過酷な物資輸送も無事に完了し、ブラゴエシチェンスクより再びソ連貨物車に乗車させられ、間もなく貨車は静かに動き始めたが、進行方向は東か西かわからない。しばらく走ると長時間の停車であり「ガタン」という衝撃、機関車の連結を感じ、いよいよシベリア本線に入ることを予感した。

貨車は走り始めたが、ウラジオストク経由の帰国であれば、貨車は東に向かい走るのが常であるが、貨車の走る方向は逆に西に向かつて走っている。帰国願望の夢ははかなくも破れ、万事休すの心境で全員落胆の気持ちは隠せず、裏切られた背信行為に憤りを感じた。

シベリア鉄道貨車の旅は十日間続き、停車は不規則

で、一日じゅう食事にありつけない事もしばしばあった。支給される食糧は、皮付き高粱・大豆・冷凍キャベツ等を混ぜて炊いたお粥や、二百グラム程度の黒パン一切れが支給され、一日一食あるいは二食であった。真つ暗な車内で頭に浮かぶことは、監獄よりも酷な地獄であり、身は常に死を感じ、忍耐の人生街道を歩く心境であった。

同年十二月中旬、到着した所は、シベリア本線ノボシビルスクより支線に入り、東北四百キロメートルの地点ケメロボ市郊外に位置するクルトイ駅であった。

十日間の真つ暗な貨車生活から解放され、下車してみると戦友全員が伸び放題の頭髮・ひげ・爪、真つ黒な顔、目だけはギョロギョロと動いている。

全員の下車が完了すると、ソ連の将校を先頭に武装した警備兵に前後左右囲まれ、空腹と疲労こんばいの体を引きずりながら、厳寒の雪道を收容所に向かい歩き続けた。

到着した收容所は、ケメロボ第五〇三收容所第五分所で、以前ドイツ軍の抑留收容所であった。

抑留地の生活 労役

私達の収容所は、満州における部隊編成がそのままに抑留され、部隊長以下の指揮系統は旧軍隊組織のままであり、他部隊からの編入者は比較的少なく、現役兵の若い兵士が主の部隊であった。作業大隊の編成は、中隊・小隊・分隊に区分され、他の収容所に比較して統制の確立した部隊であったと思われる。

当地区は炭田地帯にもかかわらず私達の作業は建築に付随する作業（掘削、煉瓦積み、砂・石の運搬）、製材工場、煉瓦工場およびコルホーズ（集団農場における植え付け収穫、牧草の刈り取り収集）、鉄道路線の敷設が主たる作業であった。

ノルマーの達成により食糧の増減は聞いているが、当収容所内における食糧配分は、均等に配分されている。しかし、朝食・夕食の粥かゆが各四百グラム、昼食用の黒パン三百五十グラムが定量であったかは疑問が残る。

抑留中の生活と極限状態における意識

シベリアの冬季における屋外の気温は氷点下三十度前後であり、服装は作業服（日本製の軍服）に防寒外套、防寒帽、足には靴下の上にボロ布を巻いてカートンキー（フェルト製の防寒長靴）、手には軍手の上に毛のついた大手袋（親指のほかは切り目がない）、二重に保護し、顔は種々の布で覆い目だけは出ているが、いくら被服で包んだとしても、外気の寒さには対応できない状態であった。

寒風肌を刺す粉雪の舞う氷点下三十度を越す屋外作業に、何の慰めもない心細い生活、空腹と疲労に襲われ、明日の命も知れず、作業の中で吐く息はたちまちのうちに凍り、眉毛は真っ白になり、口は硬直して、まつげが瞬間的に上下が凍りつき、盲目同然のシベリアの厳寒は筆舌に尽くし難い。

体じゅうが針で刺されるような痛さ（寒さ）を体験し、死んだ方が楽になれると思ったのは、抑留者の偽らざる実感であろう。

帰還

帰還の連絡 昭和二十三年七月下旬頃・ケメロポ収

容所

帰還集結地 ナホトカ港

復員船 遠州丸(貨物船)

舞鶴入港 昭和二十三年八月十二日(二千人復

員)

帰還後の生活

東京電力株式会社に在職中に現役として徴兵され、軍隊およびシベリア抑留期間は休職の取扱いがなされていた。この間(四年間)は会社より給料および賞与は在職者同様に支給を受けておりました。

休職期間の昇給および諸待遇も、在職者同様の処遇であり、東京電力株式会社には深く感謝しておる次第であります。

つらかった捕虜生活(二)

栃木県 八木澤 旺 二

北満収容所時代

我々石頭候補生隊は、横道河子で武装解除され、応急措置として造られた横道河子の仮捕虜収容所に連行された。この日から長い長い抑留生活が始まったのである。

この仮収容所は、関東軍の被服や糧秣がたくさん積んであった倉庫で、中味の品々は全部ソ連兵が本国に貨車輸送した後に我々日本兵が収容された。毎日数千人、時には百人以上の日本兵が、銃剣をつけたソ連兵に追いまくられながら仮収容所に入って来た。戦闘部隊の兵士の夏服は汗と埃にまみれ、軍靴の形も崩れ、乞食以下の服装であり、だれ一人としてしゃべる者もなく、首をうなだれ前かがみの哀れな収容所入りである。かつての皇軍の意気盛んな気迫はどこにも感ずる